

箔屋召すといひければ此下に脱文あるべし

げんにあり現に在り  
看督長一檢非違使廳に屬す檢非違使とは監察を掌る役所なり大理一檢非違使

降りなどして、少しも得取らざんなるに、これはさることなし。この後もこの金を取りて、世の中を過ぐべしと、嬉しくて秤にかけて見れば、十八兩ぞありける。これを箔に打つに、七八千枚に打ちつ。これをまろけて、皆買はん人もがなと思ひて暫く持ちたるほどに、檢非違使なる人の東寺の佛造らんとて、箔を多く買はんといふと告ぐる者ありける。喜びて、懐にさし入れて行きぬ。箔屋召すといひければ、いくらばかり持ちたるぞと問ひければ、七八千枚ばかり候ふといひければ、持ちて参りたるかといへば、候ふとて懐より紙に包みたるを取り出したり。見れば、破れず廣く色いみじかりければ、廣げて數へんとて見れば、ちひさき文字にて、金御嶽云々とことごとく書かれたり。心もえで、この書付は何の料の書付ぞと問へば、箔打書付も候はず、何の料の書付かは候はんといへば、けんにより、これを見よとて見するに、箔打見ればまことにあり。あさましきことかなと思ひて、口もえあかず。檢非違使、これはたゞごとにあらず、様あるべきとて、友を呼び具して、金をば看督長に持たせて、箔打具して大理のもとへ参りぬ。

別當の唐名  
の長官  
出でて行きて一か  
て行きての頭か  
よせばしら一罪  
人を繋ぐ柱  
かうじ一勘事又  
はつじならん  
みさく一びし  
やびしや

○今昔二十八左  
京曆紀及歴朝定  
等御大夫御參照  
下わたり一東京  
のこと  
まくわん一屬官  
をとづり一機嫌  
をとること

件の事どもを語り奉れば、別當驚きて、早く河原に出で行きて問へと言はれければ、檢非違使ども河原に行いて、よせばしら掘り立てて、身を動かさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、背中は紅の練單衣を水にぬらして著せたるやうに、みさくとなりてありけるを、重ねて獄に入れたりければ、僅に十日ばかりありて死にけり。箔をば金峯山に返して、もとの所に置きけると語り傳へたり。それよりして人のおちていよく、件の金取らんと思ふ人なし、あなおそろし。

用經あらまきさの事

今は昔、左京の大夫なりける古上達部ありけり。年老いて、いみじうふるめかしかりけり。下わたりなる家に、歩行もせで籠り居たりけり。その司のさくわんにて、紀用經といふ者ありけり。長岡になん住みける。司の目なれば、この大夫の許にも來てなんをこづりける。この用經大殿にまゐりて、贊殿に居たるほどに、淡路の守頼親が鯛の荷直を

間木一横木

かんの君一大夫  
の君  
出居一客問

おほく奉りたりけるを、贊殿に持て参りたり。贊殿の預義澄に、二卷用經乞ひ取り  
て、間木にさよけて置くとて、義澄にいふやう、これ人して取りに奉らん折に、遣せ  
給へといひおく。さて殿を出でて心の中に思ひけるやう、これ我司のかみに奉りて、を  
こづり奉らんと思ひて、これを間木に捧けて、左京の大夫の許にいきて見れば、かんの  
君、出居に客人二三人ばかり来て、饗應せんとして、地火爐に火おこしなどして、我がも  
とにて、物喰はんとするに、はかしくしき魚もなし。鯉鳥など用ありけなり。それに用  
經が申すやう、用經が許にこそ、津の國なる下人の鯛の苞苴、三つけさ持てまうで来た  
りつるを、一卷たべ試み侍りつるが、そもいはずめでたく候ひつれば、今二卷はげがさで  
置きてさぶらふ、急ぎてまうでつるに、下人の候はで持て参り候はざりつるなり、只今  
取りにつかはさんはいかにと、聲高くしたりがほに袖をつくろひて、口脇かい拭ひなど  
して、ゐあがりのぞきて申せば、大夫さるべき物のなきに、いと善きことかな、疾く取  
りに遣れとの給ふ。客人どもも喰ふべき物の候はざりつるに、九月ばかりの頃なれば、

時かはさず一時  
を移さず即別

眞魚箸一料理の  
時魚を取扱ふに  
用ふる大なる箸

くより引きゆひ  
一浮衣の袖括り  
の紐をしむるこ  
と

尻切一草履

この頃鳥の味ひいとわろし、鯉はまだ出で来ず、善き鯛は奇異のものなりなどいひあへ  
り。用經、馬控へたる童を呼び取りて、馬をば御門の脇に繋ぎて、只今走りて大殿の贊  
殿にゆきて、贊殿の預の主に、その置きつる苞苴、只今遣せ給へとさよめきて、時かは  
さずもてこ、外によるな、疾く走れとてやりつ。さて、俎洗ひて持て参れと聲高きいひて、  
やがて用經、今日の庖丁は仕らんといひて、眞魚箸けづり、鞘なる刀抜いて設けつよ、  
あな久し、いづら来ぬやなど心もとながり居たり。遅しくと言ひ居たる程に、遣りつ  
る童、木の枝に苞苴二つ結びつけて持て来たり。いとかしこく、あはれ飛ぶがごと走り  
て参うで来たる童かなと譽めて、取りて俎の上に打ち置きて、事々しく大鯉つくらんや  
うに、左右の袖つくろひ、くより引きゆひ、片膝立ていま片膝伏せて、いみじくつきづ  
きしく居なして、苞苴の繩をふつくくと押し切りて、刀して麩を押し開くに、ほろく  
と物どもこぼれて落つるものは、平足駄、古尻切、古草鞋、古沓、かやうの物のかぎりあ  
るに、用經あきれて、刀も眞魚箸もうち捨てて、沓もはきあへず逃けて去ぬ。左京の大

夫も客人も、あきれて目も口もあきて居たり。前なる侍共もあさましくて、目を見かはして居なみたる顔ども、いと怪しげなり。物喰ひ酒飲みつる遊も、皆すさまじくなりて、一人立ち二人立ち皆立ちて去ぬ。左京の大夫のいはく、この男をば、かくえもいはぬ癡物狂とは知りたりつれども、司のかみとて來睦びつれば、よしとは思はねど、追ふべき事もあらねばさと見てあるに、かよるわざをして謀らんをばいかどすべき、物悪しき人は、はかなき事につきてもかよるなり、いかに世の人聞き傳へて、世の笑種にせんとすらんと、空を仰ぎて歎き給ふ事限なし。用經は馬に乗りて、馳せ散して殿に参りて、贊殿の預義澄に逢ひて、この菴直をば惜しと思さば、おいらかに取り給ひてはあらで、かよる事をし出で給へると、泣きぬばかりに怨み誓る事限なし。義澄がいはく、こはいかにの給ふ事ぞ、菴直は奉りて後、白地に宿に罷りつとて、おのが男にいふやう、左京の大夫の主の許から、菴直とりに遣せたらば、取りてそれに取らせよと言ひ置きて、まかでて只今還り参りて見るに、菴直なければ、何方いぬるぞと問ふに、しかくの御使ありつれば、の

物悪しき人下劣なる人

わいちかゝもだやか

白地ついでよつと

わかぬし一覽殿掛の若者

切り参り料理して食ひ

給はせつるやうに取りて奉りつるといひつれば、さにこそはあんなれと聞きてなん侍る、事のやうを知らずといへば、さらばかひなくとも、言ひ預けつらん主を呼びて問ひ給へといへば、男を呼びて問はんとするに、出でていにけり。膳部なる男がいふやう、おのれが部屋に入り居て聞きつれば、このわかぬしたちの、ま木に捧けられたる菴直こそあれ、こは誰が置きたるぞ、何の料ぞと問ひつれば、誰にかありつらん、左京のさくわんの主なりといひつれば、さては事にもあらず、すべきやうありとて、取りおろして、鯛をば皆切り参りて、かはりに古尻切、平足駄などをこそ入れて、ま木に置かると聞き侍りつれと語れば、用經聞きて、叱り罵る事かぎりなし。この聲を聞きて、人々いとほしとはいはで笑ひのよしる。用經しわびて、かく笑ひ罵られん程はありかじと思ひて、長岡の家に籠り居たり。その後左京の大夫の家にもえ往かずなりにけるとかや。